

## ニュースの落とし穴

### ～「新型コロナ・ウィルス」報道から～

シンキング・バース  
歴史科学研究班

#### 「事実」を選び 「事実」を伝える限界

**連** 日のように伝えられる新型コロナウィルスのニュースは、ボクたちの感染予防対策に、貴重なソースを提供してくれます。それによってボクたちは、「自分事」としてその疾患のことを考え、行動の範囲を制限したり、マスクの着用や手洗いの励行などを心掛ける対策を講じます。ニュースは、ボクたち日常を支える重要な役割を果たしています。

でも、ニュースにはいくつかの落とし穴があります。ボクは、新聞という報道メディアで、ニュースを発信する側に立っていた経験がありますが、その落とし穴を考えると、ニュース・メディアの限界を痛感することがあります。

ここでは、ボクが感じているニュースの落とし穴について考えてみます。

#### ●「ニュース価値」とその限界

**世** 界では、日々さまざまな出来事が起こっています。その大半は、ニュースにならない出来事です。ごく平凡な出来事だったり、著名ではない人々の非個人的な生業だったり、メディアが関心を示さないことがほとんどです。ニュースは、「ニュース価値」と呼ばれる規範に沿って伝えられるケースが多いのです。

その「ニュース価値」は、出来事の重大性やニュース・メディアのテリトリー（日本語メディアであれば日本人）などによって、左右されます。ボクが在籍していた地方紙のようなメディアでは、地元のニュースが優先され、遠方の地方や海外の出来事は、直接の関係性は希薄だとして、大きな出来事ではない限り、二の次にされる傾向がありました。加えて、新聞社独自の取材体制が、全国や世界に及ばないため、通信社が配信する記事に依存していました。メディアとしての独自取材能力は、かなり限られた範囲でした。

それは、全国規模の対日本人メディアという枠組みで考えても、規模こそちがえ、思考パターンとしては、ほとんど同じだと思います。つまり、「ニュース価値」は、そのニュースを受け取る想定読者や視聴者の範囲、関係性の度合い、加えて、そのメディアの取材能力によって決まるのです。

さて、そうした条件を背後に持つニュース・メディアは、東日本大震災のようなとてつもない出来事に遭遇すると、取材体制をその出来事に傾注して行きます。どこでどんなことが起こっているかが見えない状況は、ことさらにその傾向を強めて行くと言えます。放送メディアは、ほとんどその「ビッグ・ニュース」一色になり、新聞紙面も、大半がそのニュースで占められることとなります。それを受け取る側は、それ



しかニュースがない状態のような錯覚に陥るのです。特に震災未被災地域では、錯覚の度合いが大きかっただろうと想像します。

東日本大震災の発生直前まで、メディアが伝えていた大きなニュースの一つに、ニュージーランドのクライストチャーチで起こった地震災害がありました。倒壊した建物に埋もれて日本人留学生が犠牲になり、その経過を伝えていました。しかし、東日本大震災の発生は、そのニュースを吹き飛ばす結果を招きました。当事者の家族や知人にとって、その続報こそが「ニュース価値」だったはずですが、しかし、震災の被害拡大や原発事故の発生が明らかになるにつれ、影が薄いニュースになって行きました。

一般的な判断として、国内で起こった未曾有の地震災害の発生を優先するのは、当然のことです。ニュージーランドからの続報の優先など、あり得ないことで、影が薄いニュースになるのはやむを得ないのです。

しかし、それこそが、ニュースの限界であり、落とし穴と言えます。地震災害の犠牲という点では、両者は同等だからです。

## ●ニュース割合寡占の背後で

# ボ

クが体験したこの種のニュース割合の寡占に、「昭和天皇の崩御」がありました。

昭和天皇の体調悪化の報以降、輪番制で万が一に備える体制を整えていたボクたちの新聞社は、危篤の報に次いで崩御の報が入ると、号外を発行し、翌日の紙面づくりを始めました。一切の広告掲載を取り止め、全ページにわたって崩御関連のニュースを掲載する徹底ぶりです。当時の世界的ニュースの一つだった東欧の動乱のような記事は、抹殺されて行きました。翌日の紙面は、「昭和天皇の崩御」一色に染まったのです。

恐らくその日、崩御とは無関係な出来事

が、全国各地で数多く起こっていたはずですが、予定していたイベントを実施した団体が、ボクの地元にもあったかもしれません。しかし、それらは取材さえされず、半旗を掲げた「自粛ムード」の光景だけが、紙面に反映されました。ニュースは、すべて「崩御」に関連づけて報じられたのです。

これは、ある意味では怖いことです。

ニュース・メディアは、「事実」を伝える役割を担っています。「昭和天皇の崩御」は、確かに「事実」で、ボクたちは紙面を通じて、それを伝えました。半面、その「事実」の伝達を通じて、その時のムード（空気）のようなものを作ってしまう側面を持ちました。「自粛ムード」は、東日本大震災の時にも起こり、一括にそれを否定するつもりはありませんが、他の「事実」の黙殺とムード醸成に寄与してしまったと言えます。

連日のように報じられる新型コロナ・ウィルスの世界的な拡散のニュースは、人々に注意喚起を促すと同時に、不安を煽る側面を持っています。時間枠の制約が厳しく、伝達情報量が新聞に比べて低い放送メディアは、それに関連したニュース割合を高め、人々の関心を喚起しています。また、経済活動への影響という観点から、観光客の減少や株価の下落などのニュースを報じています。どこまでが新型コロナ・ウィルス起因と言えるのか、その実態は、誰にも分からないことですが、連鎖的な現象が、各方面で起こる可能性はあります。

このニュースの落とし穴は、ヒトの疾患は、新型コロナ・ウィルスだけではないという「事実」です。循環器疾患など救急搬送が必要な事態は、どこでも起こり得ます。その患者が理不尽な処遇を受けたり、逆に五輪報道下で感染症への危惧が忘れ去られないニュースの伝え方が、必要なのです。

(2020年2月26日)

**シンキング・バース新書**

近代文明への問い  
ニュースの落とし穴

2020年2月26日（初版）発行

著者：シンキング・バース  
歴史科学研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。